

かゑらしと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第141号

令和4年2月8日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

1/11 公開講座「楠正行の生涯を学ぶ」第5回

正行23歳、四條畷の合戦 激闘の6時間

＝ 申の刻、正行、刀折れ矢尽き、正時と刺し違え自刃 ＝

● 師直3万5千騎と正行千騎の戦い ●

公開講座第5回は、23年という短い生涯、吉野朝復権という義一筋に生き、四條畷に散って逝った正行の人生クライマックスの戦いです。

正平3年1348年1月5日の四條畷の合戦は、東山道・東海道・山陰道・山陽道・南海道5道15国から集まった35,450騎の高師直の部隊と、前衛に正行、正時、正家ら600騎と後衛に惟正、行忠、賢秀ら400騎、合わせて1000騎の正行の部隊との戦いでした。

この頃の楠の兵力は約3000騎で、四條畷の合戦では、河内東条の守備に正儀、正茂ら1500騎、興良親王の入った槇尾山本営に300騎、後村上天皇のこもる吉野に200騎、合わせて2000騎は留守舞台として残ったと思われます。がため、正行討ち死に後も、正儀は河内東条に押し寄せた高師泰の軍隊を押し戻すことができたのです。

● 枚岡神社で身を浄め必勝祈願 ●

早朝に本陣をおいた河内往生院を出陣した楠正行は、途中、枚岡神社に立ち寄り、井戸で自らの首を洗い清め、必勝を祈願します。枚岡神社境内には、この時正行が首を洗ったとされる「首洗いの井戸」（今は、正行ゆかりの井戸と称されている）が残っています。

また、近鉄線富雄駅北方約1.5キロにある王龍禅寺には、四條畷の合戦で正行が使ったと伝わる鐘樓が今も残っています。

第1期の衝突は、巳の刻、午前10時、野崎砦から駆け下ってきた縣下野の守が率いる白旗一揆衆3200騎との激突でした。太平記では、縣下野の守は5か所の深傷を

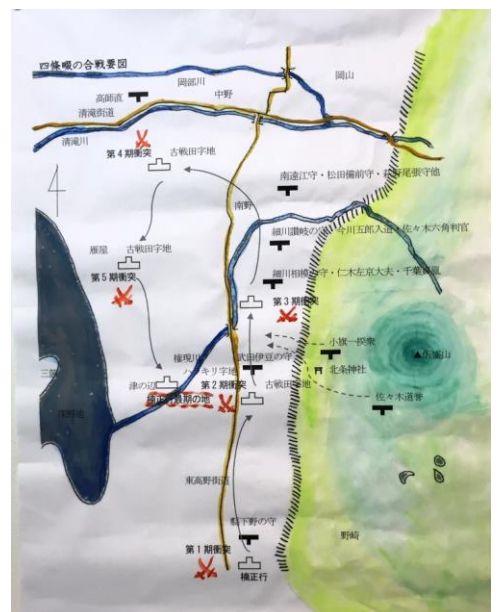
負い、師直本陣に引いて去ったとあります。

● 十念寺版木が伝える正行の死闘 ●

第2期衝突は、古戦田字地が残る北条2丁目辺りで展開されました。ここには武田伊豆の守率いる1,000騎が待ち構え、北条神社辺りには長崎彦九郎や松田左近将監ら屈強な小旗衆48騎を中心とする大旗隊・小旗隊3000騎、飯盛山南方には佐々木堂譽の軍勢3000騎が控えていました。

武田伊豆の守との戦いは、汗馬東西に馳せ違い、追いつつ返しつつ南北に引き分かれて、七、八度ももみ合いとなり、正行勢は、前から小旗一揆衆に襲い掛かれ、後ろからは山を駆け下った佐々木堂譽の軍勢に襲われ、死闘を演じ敵を撃退はするものの、大塚惟正率いる後衛は破られほぼ全滅、残る正行隊は300騎となります。

現在、この地には正行菩提寺と称される十念寺が建っ



ています。十念寺に残る本堂再建奉加帳の版木には、「永禄年中に至るまで山野に火を立て、夜な夜な相闘声門に夥し・・・」と記され、正行の兵たちが往生できずにさまよう様が描かれ、ために、十念寺本堂を再建して霊魂を祀ったと伝わっています。

第3期衝突は、南野一帯で構える3陣との衝突でした。第1陣は、細川清氏、仁木頼明ら5700騎で、交戦し退却させるも、正行隊は200騎余りになります。しかしこの時、正行隊は、田の畔に背中を押しあてて座り兵糧食を摂り態勢を整える余裕を見せます。第2陣の細川頼春、今川範国ら7100騎とは相対するも正面衝突には至らず、敵の各隊は50～60騎を失い潰走します。第3陣の松田盛綱、南宗継ら6100騎は、正行の槍隊や賢秀の薙刀によって一撃し、敵の各隊は隊列を保てず散りじりに退散しました。

● 上山の偽首に見せた正行の博愛精神 ●

第4期衝突は、正行の乗る初霜が足と胴に矢を受け、下馬し徒で進みます。古戦田字地残る、現在の四條畷保健所の前あたりの中野の地で、師直本陣5300騎に肉薄し、約半町（約55メートル）に迫りました。

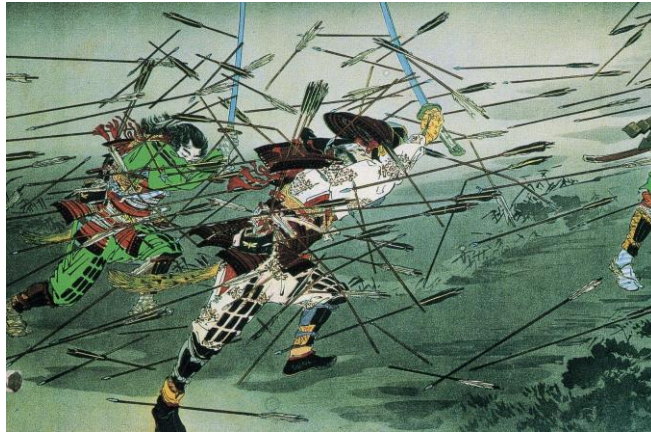
「師直、ここにあり。」と名乗る武将を、正行ら取り囲み、落馬させ、正行喉を刺し、「敵将、師直討ち取ったり。」と絶叫しますが、実は、上山六郎左衛門の偽首と分かりました。

ここでも正行は真骨頂を見せます。残る兵わずかとなり、敵将を討ちとったという高揚感の中での偽首と分かり、落胆しながらも、「汝は日本一の剛の者かな。朝敵ではあるけれども、あまりにも剛に見えるが故、他の首とは一緒にすまいぞ。」と、着ていた小袖の片袖を引きちぎり、上山の首を押し包んで、少し高いところに丁寧に置いた、という博愛の精神を見せるのです。

第5期衝突は、古戦田字地残る雁屋の地で起こりました。この頃50騎ほどになっていた正行隊は、態勢を立て直そうと中野から雁屋方面に、ススキ野原の中を退却をします。しかし、ここに待ち構えていたのが高師兼が隠し布陣していた弓隊でした。

三人張りに百矢外さぬといわれる九州強弓の名人、

須々木四郎の放った矢が正行、正時にあたります。正時は、眉間とのどぶえのはずれを射られます。正行は、左右の膝頭三か所、右の頬先、左の目尻を深く射られてしまいます。



「正時はいるか。もはやこれまで。」と、刀折れ矢尽きた正行は、最期を覚悟して、「敵の手に掛かるな！」と適地を求めて移動し、権現川堤の津の辺までたどり着き、二人刺し違えて亡くなりました。残余の兵32人も腹掻き切つて自決しました。

この地は、ハラキリ字地として今も残っています。そして、明治に入り、御旅所と呼ばれ、四條畷神社の祭礼の際に巡行され、神事が行われてきました。地域の人々にとって、心のよりどころとなった場所です。

● 賢秀、惟正も敵陣に切り込み、討ち死に ●

申の刻を過ぎ、和田賢秀は薙刀を杖代わりに師直の本陣深く入り込みますが、幕府方に投降した湯浅本宮太郎左衛門に見破られ、首を獲られます。しかし、この時、賢秀は大きな目をかっと見開き、湯浅を見つめ、その眼は最期まで閉じることはありませんでした。湯浅は、賢秀の見開いた眼の恐ろしさにおびえたまま、その数日後に落命をしたのです。

賢秀を見開いた眼の恐ろしさにおびえたまま、その数日後に落命をしたのです。

賢秀を葬る塚米の和田賢秀墓は、「賢秀は敵の首にかみついたまま亡くなった」と伝わり、ここにお参りすると「歯が強くなる」歯神さんとして、今も参詣者が絶えません。

大塚惟正は、いったん馬で遠くまで落ち延びますが、正行の討ち死にを聞き知って取って返し、斬り合って落命します。また、和田新兵衛は、東条に逃げ帰る途中に追いつかれ、首を討ち獲られてしまいます。

今、楠正行を主神とする四條畷神社には、下記の武将が合祀されています。

楠正行、楠正時、大塚惟正、大塚惟久、和田賢秀、和田新兵衛、楠正家、和田正信、和田次郎、野田四郎、野田次郎、野田松楠丸、安間了願、三輪西阿、三輪良円、青屋刑部（写真:1面合戦要図は扇谷作成、2面四條畷合戦絵図は国史画帖大和桜より）

（文責：四條畷楠正行の会代表 扇谷昭）



小楠公墓所石碑